



うたたね防備録



thinkscod

旅人が誰かとメロディを

舞台袖から薄暗い照明に照らされているライブ会場を見つめつつ、自分の中に緊張感が漲っていくのをヒシヒシと感じていた。それと同時に、充実感に満ちあふれていることもわかる。何を隠そう、俺は今まで旅に出ていたんだ。すべてが水没した後……誰もがいずれ訪れるかもしれない今より少し未来の場所を。

本当は、その場所へ訪れるのは二度目だった。一度目は旅をしている途中でビザの期限がせまってきてしまい、またその場所へ戻ってくる予定で出国することに。だけど、『一度その場所から帰ってきた者は、その場所とその場所に残してきたモノの記憶を失う』そんなルールがあることを聞いていたのに、俺は肝心の忘れてはいけない事を書き綴ったノートを忘れてきてしまい、何を忘れたのかさえ忘れてしまってその場所へは戻らなかった。絶対にその場所へ戻らなくてはいけなかったのに……。

二度目は唐突にやってきた。今日のライブを数日後に控えたその日。駅の改札を抜けたはずなのに、気づけばほとんどの記憶を失ってその場所の裏口にポツンと立ちつくしていた。

偶然知り合った初老の男性にその場所のガイドを頼んで、一度目に訪れた際忘れていった荷物と記憶を取り戻しながら、誰かが決めてくれたゴールへと辿り着いた。

……

……

…

そこは、安らかに眠っているであろう妻の墓の前。墓石に刻まれている彼女の名前を読んで、俺はすべての記憶を取り戻した。一度目の旅をする時点で妻の余命が少なかったこと。彼女がこの場所で死ぬことを望んでいることを話してくれたこと。初老の男性がガイドをしてくれた場所は勿論、それ以外の場所も一緒に旅したことも……とにかくすべて。

そして、幽霊になって現れた妻を目の辺りにしたとき、俺は何故かその場所の神様の存在を感じ取った。きっと、不安な気持ちを胸に秘め、子供のように泣きじゃくる彼女の事を神様はほとけなかったのかもな。

自分の名前を呼ばれたので、考え事を中断して振り返るとバンドメンバーがそこにいる。2人の女性ボーカル、ギター、パーカッション……。彼らもようやくあの人なつつこい妻の笑顔や、俺が彼女のために作った曲を思い出していた。バンドメンバーと円陣を組んでテンションを高めると、手に楽器を携える。一曲目には似合わないけど、ここへ戻ってきたときから、これを最初に演奏しよう決めていた。頭の中でコードをすぐに思い出していく。

(もう、二度と忘れないから)

肩を叩かれると、目の前に二人の女性ボーカルが優しい笑顔を浮かべて立っていた。俺がここへ帰ってこれたのは彼女たちのおかげでもある。彼女たちの声のおかげで、俺は音楽を思い出することが出来たんだから……。うなずき返すと、ライブスタッフが開演時間になったことを伝えてくれた。インストゥルメントゥル曲にノって二人の女性ボーカルが入場した後に、俺は入場した。楽器を構えて大きく深呼吸する。目をゆっくりと開けると、暗がりの中で演奏を今かと待って

いるファンの姿が見えた。

この一曲だけは、ファンじゃなくて……彼女のために演奏させて欲しい。君に伝えたいんだ。

(また、会う日まで……サヨナラ)

本日、最初の演奏が始まる。

エンゲージリング

「第794613265126497856次大気圏外観測終了。規定項目外事項無し」

“サジタリウス・ラーからATR-01へ、データ受信完了しました。帰還してください”

球体の全天向型モニターの足下には、地球があった。しかし、それは遙か昔の教科書や宇宙飛行士が言っていたように海の青さや大地の茶色、大都市の電光なんて見えやしない。今の地球はオパール色に覆われていて、地球を中心に二重のリングが自転の早さに合わせて回転をしていた。

地球は正確な年代が忘れられてしまうほど遙か昔に核の火によって滅びを迎える。宇宙空間に逃げ道を求めた人類は、いつか青き清浄な地に帰ってくることを夢見て惑星再生用のナノマシンを散布した。そうして、地球という惑星はオパール色の繭に包まれることになる。

“ATR-02からATR-01へ。また地球に見とれてるのか？さっさと帰らないと食堂が混むぞ”

「青い部分が見られるんじゃないかって目をこらしてただけだよ」

アノイはバイザー越しに見ていた地球から視線を外した。息を吐いて気持ちを現実に引き戻したとき、モニターに接近警報アラートが表示される。そのまま光学ズームを行うと、宇宙ステーションの残骸みたいなものが漂っている光景が表示された。

「ATR-01からATR-02へ。コンディション・イエローからパープルへ移行。火器制限解除」

“デブリ破碎活動なら、サジタリウス・ラーに任せの方が良いんじゃないですか？こっちの火器で大丈夫なんですか？”

「ラーの攻撃だとリングを傷つける可能性があるだろ？それに少し不安が……」

全天向型モニターの外側、いやアノイが乗り込んでいるコクピットを心臓部とした物体のロックが解除されると、それは機械の巨人と化した。赤い全身鎧を身にまとった巨人は、スライドして巨大化した盾を左手に、腰部にマウントされていた巨大なライフルを右手に持たせる。モニター越しに見えるATR-02も同じく巨人の姿になった。

その途端、残骸が軽いスパークを起こして分解される。その中から出てきたのは同じく全身鎧をまとった一つ目の巨人達だった。

「予想通り！！」

ATR-01から放たれた光の銃弾は、無防備な状態だった一体をいとも簡単に貫通する。ATR-02の光弾は二機目の片足をもぎ取っていった。

“機体判別完了。グローリア宇宙公国のギ・ト”

「公国がこんなところで！！」

三機のギ・トが撃ってきた光弾の群れを、ATR二機はバーニアを小刻みにふかして踊るように避けていく。ATR-02が三度目に放った光弾が片足を失っていたギ・トを貫通し、アノイが操るATR-01が最後に放った光弾がもう一機を貫通した。

“もう一機しか残っていない割には、敵さんは余裕そうですね”

再度、モニターに接近警報アラートが表示される。

「足下か！！」

モニターを光学ズームさせると、機体を覆い隠せるほどの巨大なバインダーを四枚付けた巨人が

見えた。そのバインダーから放たれる八本の光の柱……メガビームが襲いかかってくるので、緊急回避する。

「なるほど、新型の試運転してたってクチか！！」

ATR-01は弾切れになったライフルを捨てると、同じく腰にマウントされていた剣を掴んだ。

あの場所

神保町……誰もがその名を聞けば古本屋街と答える有名な町であるが、そんな町でさえ裏の顔を持っている。またの名を「神寶町」と言った。どうしてそう呼ばれているのかは、もう町に残っている誰もが覚えてはいない。（最近になって町の地下から出土した書物によると“神からの恵みの町”という意味合いがあることが発見された）

雨が降りしきる中、瀬野 佳光（せの よしみつ）は傘ごと空を見上げた。雨は小降り、後二～三時間で止みそうな気配がする。本をこよなく愛する人間の一人としては雨と湿気は好きじゃなかった。サラリーマンとしての仕事を終えた夜遅い時間、表向きの書店はすべて閉店している。佳光は鼻歌を奏でながら、記憶の地図にそって入り組んだ細い路地をためらうことなく進んでいく。古びた中華料理屋の前で油の匂いを嗅ぎながら、古い木造二階建ての扉を開けた。暗闇の中を見回してみる。玄関の壁に掛かっている人物絵の絵画は左側を向いていた。

「今日はじいさんの方か」

玄関を上がってすぐの扉を開けると、地下への入り口が現れる。佳光は鞆の中に入れておいた懐中電灯を取り出すと、よく見えない足下を照らしながら下へと降りていった。辿り着いた底のドアを開けると、木造二階建てには似合わない豪勢な洋室が現れる。豪勢な家具の他には、四方の壁は天井に届くまでの本棚が設置されていた。

「おやおや、ただのサラリーマンが来るような場所じゃないよ」

部屋の奥にある豪勢な椅子がクルッと回ると、いかにも古書店の主人……と連想させてくれる風貌の老人が顔を見せる。

「その冗談は聞き飽きましたよ」

「はて、これが初お披露目じゃなかったかい？」

「もう数十回は聞いたと思うんだけどな……」

老人は肩をすくめると、おもむろに立ち上がった。

「で、何の知識が必要なんだ？」

佳光は壁の本棚を一通り見回してから、老人の顔を見る。

「あの場所の扉が開くという……情報を得た。入り方が知りたい」

そう言った途端、老人は軽快な唇を吹いた。

「滅多に平開かないと言われていたあの場所がか？確か前は三年前だったな……。一体どうなっているんだ？」

「さあ？地球温暖化とかもろもろの事情が重なっているんじゃないの？もしくはありとあらゆる場所へ出入りできる帝の血縁者が、どうしても入りたがっている……なんてこともあるかもしれないな」

老人がうなり声を発しながらテーブルに置いてある地球を何度か動かす。すると、壁の本棚が独りりで動き出し、更なる新しい本棚が現れた。

「俺たちが入るには、少し封印を破らないと行けない必要があるかもしれないなあ。確か……」
新しく出現した本棚から一冊の本を抜き出してくる。

「侵入口は神田明神だな。あそこのガーディアンシステムはかなり強力だぞ。一時無効化なんて

「というのは紙切れに等しいだろうな」

それを聞いて佳光は思わずため息を漏らした。

「まあ、場所が場所だ。天の岩戸をこじ開けるよりは簡単だろうよ」

「やはり、妹か……？」

老人の言葉に佳光は何も答えず、渡された書物の全ページに目を通していく。

“世界は覚醒した”それは、名前の知らない評論家が言った言葉である。ある意味、それは正しいと言えた。日本……いや世界が頑なになって人類繁栄のため、道路や建築物などを秘密裏に特殊なアスファルトやコンクリートにすり替えて、全知全能の物質を地面に封印していたのである。その全知全能の物質たる名は「神体」……古来から“八百万”と言い伝えられていた神々の肉体だった。

二十一世紀になって、頻繁に発生した大地震のおかげで、文明の歩みが停まったと同時に八百万の神々の身体が復活を遂げる。しかし、人類繁栄のために採取されすぎた穴だらけの身体では神としての力をふるうことができず、動植物やモノの中に入り込んで休眠していった。八百万の神々が入り込んだ動植物やモノはそこで既存の次元を飛び越えて、力をそれ程持たない怪やつくも神となる。

俺は読みかけの本を閉じて、手のひらに乗っているシャープペンの形をしたつくも神を眺めた。

「どうして、こういうのが見える人間と見えない人間がいるんだろうな？面倒だから全員見えてくれれば良いのに」

じゃれついてくるつくも神をあやしてポケットの中に入れて、待ち合わせ場所に指定されたコーヒーチェーン店に足を踏み入れる。ここは、待ち合わせ以外でも個人的によく利用していた。いらっしゃいませとカウンターに立っていた女性を見て、俺は思わず嫌な声を発しそうになってしまう。つい最近ここで働き始めた彼女は、何故かソフトクリームマシンのつくも神と仲が良くなかった。彼女にフロートやココアを注文すると、必ず上に乗せるソフトクリームの盛り付けを失敗する。

……

……

…

今日も、あえなく彼女は失敗した。まあ、あえて失敗する姿を見るために注文する俺も俺なんだけどな……。

席に腰掛けてしばらくすると、俺を呼び出した杵島のおじさんがやってきた。実は彼から一軒家の管理人として住み込んでくれないか？と前から頼まれていたのである。俺の友人である杵島が元々は管理人をしていたが、彼が海外留学をした際におじさんが引っ越したと聞いていた。しかし、どうやらあの古屋に集まったつくも神や怪と相性が悪かったらしく、杵島と仲が良かった俺の親に管理人の話がやってくる。まあ、俺の場合は怪やつくも神の事に関してちょっとした噂が立ってしまったからな……。まあ、その話は別に機会にするとしよう。

今日はここで簡単な契約書を書き、一月分の管理人代を受け取った。まあ、この管理人代がもらえるというのが、引き受けた本当の理由でもある。一応働いてはいるものの、収入が苦しいのに変わりはないからな。

ふと、視線を感じて足下の方を観ると、おじさんの足にまとわり付いている犬の怪がいることに気づいた。なるほど、家の代表として俺のことを視察に来たらしい。こっそりと胸ポケットに

入っていたつくも神を地面に置いてみると、つくも神同士なにやら話をし始めた。
こいつら……話ができるのか？ といえば、人間と話ができる怪がいるって聞いたことがあるな
。

「じゃあ、よろしく頼むよ」

彼はアイスコーヒーを飲み超すと席を立って店を出て行く。おじさんを見送った後、俺は地面にしゃがみ込んでいたつくも神を再びポケットの中に入れて、ココアに目をやる。盛りつけに失敗したアイスクリームが見事にトレイへ零れていた……やれやれ。

ゲネル・オドホックはいつもより早く一仕事を終えていた。いつものように肉屋で少しの肉と、野菜屋で野菜と果物を買うと、町外れの寝床までノンビリと歩いていく。道すがら、いつものように民家の窓から鍵盤楽器の音色が聞こえてきた。

（ああ、この音を聞くと落ち着くな……）

と思っていたのもつかの間、人の走る足音が4つ、5つと聞こえてくる。

「何だ？」

ゲネルが振り返ると、若い青年を4人のフードで身体を隠した男が追い立てていた。若い青年の方は、ここら辺では見ない綺麗で整った顔をしている。

（きっと、周辺の貴族か何かなのだろう）

この道の先は自分の家しか存在していないので、ここで放っておいても後々問題に巻き込まれるのが目に見えていた。大げさにため息を漏らしていると追いかけてこをしている彼らがゲネルに追いつく。

「男、邪魔立てするな！無駄に命を落とすことになるぞ！！」

その言葉に背後を見ると、貴族らしき若い青年が自分を盾にするような位置にいた。

（やっぱり、こうなるか……）

「おい、青年。落とすなよ」

おそらく顔を上げたであろう若い青年に持っていた荷物を投げ渡すと、襲いかかってくるフードで身体を隠した男一人を地面に叩き付ける。ゲネルの手には、いつの間にか細剣が握られていた。ゲネルは地面に叩き付けた男をチラッと見る。その男は東側のアの国で好んで使われる歪曲剣を持っている。

「異国の暗殺者が我が国で、拉致でも企てようと言うのか？」

襲いかかってきた別の男が繰り出す斬撃を細剣で受け流すと、彼は、地面にその細剣を突き刺した。

「天に満ちあふれる万物の力、敵意ある者に地の飛礫を！！」

地面がほんの少し輝きを放ったかと思うと、いくつもの拳大の石が撃ち出されるように飛び出して、男達に襲いかかる。撃ち出された岩は一人の頭と別の一人の右肩に大きな傷を与えた。

「お、おのれ……天導師だったとは」

うめき声を立てつつ後ずさりしている者達に、ゲネルは細剣の切っ先を向ける。

「去れ！さもなくば次は雷がお前らの身体を貫くことになるだろう」

ゲネルのこの言葉に臆したのではなく、傷を負ってない者が一人になってしまったこともあって彼らは手際よく後退していった。

「物わकारいの良い連中で助かった……。君もどこか怪我などは……」

細剣を鞘に収めながら後ろにいるはずの彼の方を振り向くと、少し離れたところで彼は地面に倒れ込んでいた。ゲネルは嫌な予感を覚えながら彼を抱き起こす。しかし、外傷はどこにもなく寝息が聞こえてきたので、安堵のため息をはき出した。

「あんな男達に追われたのだから、無理もないか……」

「先生っ！！」

声がした方へ振り向くと、ちょうど帰ろうとしていた方向からゲネルの一番弟子でもあるコトラが急いで走ってくるのが見える。

「ああ、何でもない。ちょっと人助け……をしたところだ」

自動ドア

今週の晩ご飯の献立を考えながら駅前のスーパーへ入ろうとしたとき、義彦に異変が降りかかってきた。店内では買い物をしている客が沢山見えるのに、自動ドアが開いてくれない。前も自動ドアが反応しづらい……なんていう事があったが、これはしづらいなんてレベルではなく、まったく反応を示さなかった。

（何だ、これ。もしかして、俺が来る直前に壊れたのか？）

自動ドアを隔てたすぐ側に警備員がいるので、ドアを叩いて警備員を呼んでみる。しかし、警備員はいっこうに気づく様子はない。

「何だ、ここの警備員は！！」

昼間の仕事のストレスが溜まっていたこともあり、思わず自動ドアを蹴っ飛ばしてしまうが、それでも警備員は気づきもしない。

「仕方ない……コンビニにするか」

スーパーに入るのを諦めてその場を去ろうとしたとき、OL二人組が他愛ない会話をしながらスーパーの中へ入っていくのが見えた。

「何だよ、普通に入れるんじゃないか！！」

俺は走ってスーパーの入り口まで戻るが、そこへ辿り着いたときにはもう自動ドアは音を立てて閉まってしまっている。その後、どんなにがんばっても自動ドアは再び開いてはくれない。

「一体、どうして開いてくれないんだよ。せっかく今週の献立を完璧に思いついたのになぁ」

そのとき、外に置いてある果物の段ボール箱の横にフランチャイズファミレスの看板が立っていることに気づく。

（そういえば、上の階がファミレスになってたんだよな、ここ。いいか、それじゃあ……中華でさ）

学生のとときに二～三度訪れただけのファミレスのメニューを思い出して何を食べようか考えながら、俺は二階に上がった。

「改装中のため……臨時休業？」

最近よく見かける改装中のため臨時休業の張り紙に、胸ポケットの中に入っていた赤ペンで思わず落書きをしてから一階へ戻ってくる。

（まったく、いくら再開発ブームだからって店内を改装することは無いと思うんだけどなぁ。それともあれか、こういうフランチャイズの内装ってちょくちょく変えないと井戸端会議をするおばさんどもには不評なんだろうかねえ）

家の近くのコンビニで済ます決意をしてその場を離れようとしたとき、今度は中年の男性がスーパーの自動ドアをくぐろうとしているのが見えた。

「今度こそ！！」

自動ドアからかなり近い距離にいるにもかかわらず、俺は全力疾走する。

（これなら、今度こそ中に入れるだろう。もし、今度は出られなくなったら……それはそのとき考えることにしよう）

しかし、ここでまたしても不可解な出来事が襲いかかってきた。確かに自動ドアは全快に開い

ているのに、俺は何か固い壁に激突したような衝撃を覚えて中に入れない。そうこうしているうちに自動ドアは再び音を立ててしまってしまった。

「何だよ、どうして入れないんだ！！」

「あんた、死んでるからだよ」

警備員の言葉にギョッとして自分の足下を見ると、俺の足は確かに透けている。

神喰羅（かぐら）

日本は本当に不思議な国だ。文明開化という大義名分の元、特殊なアスファルトやコンクリートを使って八百万の神々や妖共を封じ込めて近代化を計っている。“臭いモノには蓋をしろ”まさにそんな感じだ。しかし、中途半端な整備と補強では耐久年数が少ないアスファルトとコンクリートでは百年ももたずに封印にほころびが現れる。

そこで国民には一切公開されることなく太古の省庁が復活されることとなった。それは“陰陽省”。怪しい力には怪しい力で対抗しようってわけだ。

とはいえ、古来と違って退魔を行える本当の陰陽師などは、もうとうの昔に絶滅してしまっている。そこで、考え出された戦法はまさに“毒には毒をもって制す”という言葉がふさわしかった。妖怪の中でもトップクラスの強さを持っていて、限りなく人型に近い『鬼』を解剖&研究して人造の退魔師を作り上げることに成功する。

佐久間 陽司も人造の退魔師……『神喰羅（かぐら）』の一員だ。退魔のやり方は至って簡単。神々や妖怪の魂を引きはがし、名前通り喰って胃の中で消化しながら浄化するのだ。

（神喰羅になってから、食べ物が美味しくなくなったな……）

陽司はそれだけが残念でならない。

高層ビルの屋上から景色を眺めつつ、陽司は手の中にあるコーラの空き缶を転がしていた。

「コーラの味でも思い出そうとしてたの？」

声がした方を振り返らずに、陽司は黙ってうなずいてみせる。

「私もね、時々ケーキの味を思い出そうとするの。お母さんが手作りで作ってくれたケーキ」
腰まである長い黒髪をいじりながら、彼女は空を見上げていた。

「俺の母さんは不器用だから、いつもスポンジケーキを焦がしてたよ」

お互い視線を合わせることなく一緒に笑っていると、空気が流れが重くなるのを感じ取る。

「二人だ」

陽司がそう言った途端、高層ビルの屋上に見慣れた黒い体毛で覆われたモノ達が大きな音を立てて着地した。

「犬人共か、妖気を感じからして地面から出てきて間もないな……」

そのモノ達が立ち上がると、確かに頭部と下半身が犬で上半身が人間……かつ全身が黒い体毛で覆われている妖怪になる。

「随分と人に化けるのが上手いんだな、兄弟」

「残念ながら……」

陽司の腕が一体の犬人の左胸をいとも簡単に貫いた。いや、いつのまにか陽司の腕には灰色のゴツゴツした外装が取り付いていた。そのまま、空から降ってくるかのように全身を覆い隠す外装が彼に取り付いていく。その姿は本当に鬼のようだった。

【お前らと兄弟になった覚えはないな】

気づけば彼女の方も同じような状態になっている。陽司はためらうことなく腕を引き抜くと、手には光り輝く光玉を握りしめていた。それを外装を通して自分のクチへ放り込むと弾力のある歯

ごたえを感じながら、良く噛んでそれを飲み込む。

【触感を感じるんだから、せめて何かしら味を……いや、味まで感じたくはないな】
ガラスが碎けるような音が聞こえたかと思うと、陽司は元の姿に戻っていた。
「これで明後日までは水以外口にすることができなくなるわけだ……」

恋のはじまり？

時々思う。人は帰り道を一度覚えると、その道しか歩かなくなるのだろうか？ふと、そんな事を思いつくと、今日は違う道を歩いてみることにした。

この街へ引っ越して……もう五年が経とうとしている。なのに、まだ家の周りの道を詳しくは覚えられていなかった。それとは逆に、仕事場近くの道……はたまた、部屋から仕事場まで徒歩で行ける道などを数パターンも頭の中に入っている。

(大災害が起こったら……真っ先に水没しているであろう場所に帰れるわけないのに)

賃金の安さに飛びついて入居してみたが、じつは大きな二本の川に挟まれるように孤立している場所なのだ。つまり、大災害で橋が落ちたり、堤防が決壊すればジ・エンド。

「生きている間に起こりそうにないことだろうけどね……」

そんなことを考えていた俺は、今日も一人だ。友人関係をすべて地元へ捨ててきた俺にとって友達はいない。会社の同僚なんて同い年なんて一人もいなければ年の近い相手もいなかった。だから、哀れ……都会の一匹狼らしい。

(でも、寂しがり屋)

部屋に戻ってさっさと部屋着へ着替えると、ガスコンロの火を付けて夕飯を作り出した。食費を安く抑えるには自炊が一番だ。手早く作ったナポリタンを皿に盛って、窓際で食べる。

気づけば、今日もあの時間だ。目の前のアパートからはお香の香りが漂い始め、下の階からは女の子のさびしい声が聞こえてくる。今日も父親の下に娘が組み伏せられて喜んでいるのだ。

(まあ、想像ですけど……)

丁度夕食を食べ終わると、ベランダに置いてあったコップへ水を注ぐ。それは飲むためのモノではなく、そこに活けてある花のためだった。この街だけで言えば指折り数えられる中に入っている美人が経営しちえる花屋で買ったもの。……まあ、俺の好みから少しだけ離れていたのも、俺はその気にならなかった。その気になったところで、彼女は俺なんかに振り向かないだろうし……。

およそ一週間ぶりに晴れて現れたのは……青空。これでようやく洗濯物が干せるってものだ。洗濯物をしていると、下の階のベランダが開く音が聞こえる。俺はこっそりと下をのぞき込んだ。見えたのは男の子のようなベリーショートの子。痩せ過ぎてなく、しっかりと三食取っている体つきをしていた。胸も小降りな小山程度で、まさに理想的と言っても良い。ああいう綺麗な子には彼氏が付きもの。

「あーあ、クソツタレ」

熱気と湿気がもう文句を言う元気すらも写っていった。丁度そのとき、手に持っていたハンドタオルが下に向かって落ち始める。

「ああ、しまった……」

いくらお気に入りの柄だったとはいえ、元は百均セールの商品だから、そんなに悔いは残ってなかった。

「スイマセン、コレハアナタノデスカ？」

いかにも外国人ぽいカタカナで全部表現されそうな挨拶が帰ってくる。声がした方……つまり階下をのぞき込むと、ベリーショートの子が片手にワインの瓶を、もう片方の手には先ほど俺が落としたハンドタオルが握られていた。

こんな偶然から始まる恋……なんていうものが実際にあったら、俺は喜んで実行したいね。

「いやいや、そんな勇気などなくせに……」

疲れた身体を引きずって、悟はようやく自分の家へ帰ってきた。「ただいま」と言っても返事が返ってこない一軒家は……妙に寂しさを感じさせてくれる。

「朝のうちに夕飯の仕込みをしておいて正解だったな」

悟はリビングのソファに置いていた部屋着に着替えると、その足でキッチンに立った。コンロの火を付け、朝から考えていた料理を作り出す。

塩漬けした鶏肉を丁寧に流水で洗い、これはグリルの中に入れた。火を付けたコンロの上には野菜や肉を煮詰めたモノが入っている。そこに香辛料数種類とワイン、カレー粉を入れてコトコトと煮始めた。

— そうだった、ご飯を炊かないと —

米を研いで水にしばらく漬けておくことにすると、悟はゆっくりと家の階段を上っていく。そして、廊下の突き当たりにある部屋のドアを静かに開けた。明かりを付けていない薄暗い部屋を月明かりに照らされて、誰かの寝姿をうっすらと見せてくれる。悟が足音を立てないようにゆっくりとベッドの横に立った。見下ろしているベッドの上にはまるで男のような髪の毛の短い女性がただ眠っている。

「ただいま」

彼女は悟の姉……正確には義理の姉だ。兄との結婚が上手くいかず、離婚した後も行く場所が決まらない彼女を両親が家に引き留めていた。

— まあ、引き留めている間に気が変わるかもしれない……とでも思っていたのかなあ —

でも、悟は知っていた。もう気が変わるなんてレベルじゃなかったことを。

そうして季節を重ねていくうちに、彼女は眠ったまま起きなくなってしまった。色々な医者へ見せても誰もが首をかしげるばかり。最後は両親も諦めてしまい、海外へ旅行に行ってしまった。そんなわけで、取り残された悟は仕事をしながら彼女の世話をしている。そんな状態がもう三年も続いていた。

— 世話って程の事はしてないか…… —

寝ている姉の髪の毛を数回撫でると、悟は音を立てないように部屋を出て下へ降りていく。カレーの煮込み具合も丁度良くなっていた。今日はいつもと違って新しいスパイスを使っているから、どんな味になるのか悟はワクワクしてしまう。

炊飯器のスイッチを入れ終えて一休みしようとしたとき、不意に天井がギシギシなっていることに悟は気づいた。この家に起きている人間は悟しかいない。

「何だ……まさか、泥棒？……姉さん！！」

大急ぎで階段を駆け上がって姉の部屋を向かおうとしたが、悟は二階にあがったところで足を止めた。

信じられないことに、姉が窓越しに夜の月を見上げている……。それは夢でも何でもなく、姉が起きたのだ。

「……悟君？」

まだ寝ぼけたくぐもっている声が悟に向けられる。

— そう、俺はこの笑顔がずっと見たかった —

「おはよう、姉さん。って……もうすごい時間が経って夜になっちゃってるけど」
悟がそう言うと、彼女はまた夜の月を眺める。

「何かね、美味しそうな匂いがして……目が覚めちゃった」

カメラ

— 雨の日は好きじゃないな…… —

切ったばかりの髪を手でいじりながら、有紀は空を見上げた。猫毛になるのがイヤで梅雨になると必ず髪のをバツサリと切ってしまう。

それだけの理由なのに、噂好きの同僚達は毎回「彼氏と別れたんでしょ？」なんて聞いてきた。

— どうして、頭の中が桃色でいっぱいなのかしらね。そんなに結婚したいなら自分がすれば良いのに —

いつも下車している駅の一つ手前で下車すると、有紀はミニシアターのプログラムをチェックする。

「まだ、上映する映画館があったんだ……」

上映作品の一つとしてあげられている作品に有紀は目を止める。

とある有名なサーファーが世界を半周しながら、サーフトリップを巡るドキュメンタリー映画だ。ただのサーフィン映画というわけではなくて、風習、宗教、恋愛……色々な要素が盛り込まれていて、見ている者を飽きさせない作品だ。

— そういえば、彼……サーフィンなんて出来たのかしら？ —

有紀はこの映画の撮影に同行したカメラマンと付き合っていた。その彼は昨年病気であっさりこの世を去っている。

「私、まだまだあなたが撮った空を見たかったのに……」

有紀は隣にある本屋で新しい本を一冊購入した。最近、電気街で8mmビデオカメラを手に入れることが出来たので、その操作方法と撮影術を彼女は学ばなかったのだ。

「映画……なんて大それたモノじゃないけど。私もね、レンズ越しの空を見てみたいのよ」

有紀はもう一度雨が降っている空を見上げる。

“空を見上げるとさ、立ち上がる元気がもらえると思わない”

彼はいつもそう言っていた。最初は有紀もその言葉に関して半信半疑だったが、一日、三日、一週間、一ヶ月と空を眺めている時間が増えていくことで、彼女は普通に生活していくだけの元気を蓄えていく。

— 私、もう大丈夫だから…… —

もう地上の声が聞こえないはずの彼に向かってそう言うためにも、有紀は8mmビデオカメラを購入したのだ。

「まあ、我ながら馬鹿らしいとは思うけど……」

部屋へ戻って部屋着に着替えると、冷蔵庫の中に入れていたジッパーを取り出す。保存用ジッパー付きビニール袋の中に入っている豚バラの水分の出具合を確認した。

「よしよし、良い具合に水が抜けきったな」

ジッパーを開けて水を抜くと、味を確かめてみる。

「うへえ、いつも通りの味」

これも亡くなった彼が教えてくれた味だ。冷凍された生パスタを解凍して、それをさっと茹

でる。後は数種類のチーズと卵などを合わせてカルボナーラのソースを作り、水抜きをした後に炒めた塩豚をソースの中に加えた。それを生パスタの中にからめればパスタの完成。

— これも、彼が教えてくれた味 —

テーブルの上に夕食の準備をしながらテレビを付けると、ちょうど天気予報が映っていた。

「晴れはしないけど、良い波が来そうね」

有紀は有給を取っていたことを心の中でガッツポーズした。

「本当は、晴れていてくれた方が良いけど……行ってみるかな」

お買い物もの

「お腹が空くと……私って機嫌が悪くなるのよね」

それは、義恭の隣でウィンドウショッピングをしている彼女の口癖だ。

— なんて簡単な……というかわかりやすいヤツ —

洒落たレストランや映画館や観光スポットのデート……そういう着飾った部分が無くなると、義恭は彼女が随分背伸びをしていたことがわかってくる。

まず、彼女は質より量を選ぶ人だ。高級レストランで着飾った料理をチビチビ食べるより、食べ放題の焼き肉をお腹いっぱい食べる方が幸せらしい。無論、たまには高級そうなものも食べるそうだが……。

次に映画館、彼女は大きなスクリーンで観るのは好きだが大勢の他人がいて集中できないこととビールが高いのが嫌なんだそうだ。

そんなわけで週末は中古ビデオショップや大型CDショップで安い映画DVDを物色してどちらかの家で観ながらノンビリするのが最近の休日の過ごし方になってきている。

無論、料理は当番制で、今日はちょうど義恭の番だった。義恭は周囲がメタボリックと騒ぎ始めたので少し食べる量を意識しているが、彼女はそんなことはしない……と言う。

「だって、せっかくの美味しいモノをカロリーだ、あーだって我慢するのって返って身体に悪いような気がするのよね。それに私、バイクをやめて重りを付けて自転車に乗ってるし」

そう、彼女は会社の行き帰りを両腕と両足に5kgずつ重りを付けて漕いでいた。

— 自転車のタイヤが少し可哀想な気がしないでもないが…… —

新作DVDや新しい家電良品を見終わった後は、二人揃ってスーパーへ。混ぜご飯の準備は終わっているが、肝心のメインディッシュを義恭は決めあぐねていた。

「魚は先週ごちそうになったから、今回は肉だよね……」

義恭が手に取ったのは鳥の胸肉。

「やっぱり、これかな……安くてボリュームあるし」

「義恭が豚とか牛を食べているところが、あまり想像できないんだけど？」

彼女の言葉に義恭は思わず頷いてしまった。豚コマは毎週水曜日が安くなる日なので、仕事帰りに残っていたらその週は豚肉。残っていなかったら鶏ムネと決めていた。今のところ豚コマが冷蔵庫に入っている割合は鶏ムネより低い。

「まあ、一重にお財布の中身との戦いで鶏ムネはたいがい勝利するってヤツだよ」

「じゃあ、牛肉は？」

牛肉を見て、義恭の手がピタッと停まる。輸入牛肉が盛り返しているおかげでここ二、三年に比べて牛肉の価格がかなり安くなってきていた。

「貧乏性……っていうわけじゃないけど、牛肉って冬のすき焼きとかそういうの以外だと誕生日とかのお祝いとかにしか食べないイメージだよな。後は食べ放題の焼き肉……」

「うーむ、そういうモノなのか」

どうやら彼女のお腹の中では今日は牛肉が食べたいらしい。

「まあ、任せておきなさい。鶏肉でも十分に食べ応えのあるものを作りますから」

彼女は、しばらく考えを巡らせた後に義恭を見つめた。

「じゃあ、赤ワインとチーズもね」

— それで手を打つってわけか —

「はいはい……」

『天使の梯子』……という現象がある。濃い雨雲などの切れ間から差し込まれた太陽の光が肉眼で確認できるという現象だ。柱のようにもカーテンのようにも見えるそれは、間違いなく神秘的なモノである。

御小島 靖恵は今のところ一度だけその光景を目撃したことがあった。あれは、うつというより……無気力症のような症状になってしまった時のこと。会社を一週間ほど休み、「これ以上は良くない……何でも良いから外に出よう」と思ってあてもなく川沿いを歩いていたときだった。闇雲に歩いていた靖恵は葛西臨海公園まで辿り着いてしまう。

「以外と、歩いていけるものなんだ……」

とまるで他人事のように思いながら園内をくまなく歩いていると、人工の砂浜が公園になっていることに気づいた。興味津々で中に入ってみるが……まあ、そこは東京湾。砂浜は貝の死骸が混じっていて、波打ち際はゴミ袋が漂流していた。

— 音だけがロマンチック……っていうのはどうなのよ？ —

さらに状況を悪化させるかのようにポツリポツリと雨まで降り始める。

「もう、最低……」

きびすを返して返ろうとしたとき、鳥よりさらに大きなシルエットの飛行機がお台場方面へ徐々に高度を下げていくのが見えた。

— 空港が近いから飛行機が大きく見えるのかもしれない。それとも、天候が悪いだけ？ —

靖恵は飛んでいく飛行機を目で追いながらお台場の方を向いたとき、その現象を目撃する。

雨雲……というより雷雲に近い黒い雲の隙間にある青空から差し込んだ太陽の光は、鮮やかで力強い光の柱を靖恵に見せつけていた。

“ゴクリッ”

と靖恵は自分が生唾を飲み込む音で我に返る。目の前に広がる光景をカメラで納められるかどうかはわからないが携帯を取り出そうとした。しかし、携帯は見あたらない。

「そうか、家に置いてきちゃったんだ……」

自分のうかつさを呪いつつ、せめて記憶の中だけは忘れないようにと……それから一時間ぐらい、その光景に見入っていた。それ以来、靖恵は何か落ち込むことがあるとこの場所へ来ている。それと一緒に靖恵は牡蠣フライも作るようにしていた。

何時の頃だったか、幸恵が人工砂浜の防波堤の上を歩いていたとき、沢山の貝殻が不自然に散乱していることに気づき、防波堤の先に奇妙な立て看板が立ててあることにも気づく。

「食べた牡蠣の殻は捨てずに持ち帰ってください」

最初、この文面を読んで靖恵は我が目を疑った。確かに波打ち際の岩には貝が沢山へばりついている。これらすべてが牡蠣で……それを勝手に食べている人が後を絶たないのだ。

「でも、東京湾の牡蠣って……何か危険なんじゃあ？」

少し興味があるものの、自ら食い散らかしている人達の仲間入りしたくなかったので帰りに牡蠣を買って帰ったのが、この習慣の始まり。

衣を付けた大粒の牡蠣を170度前後の油で香ばしく揚げている間に、タルタルソースの準

備だ。マヨネーズと塩で水を出したヨーグルトを合わせて、たくわんやら野菜の残り物を刻んだモノを入れる。あとはゆで卵とオリーブのみじん切りも加えたら少しすっぱめに味を調べれば靖恵自慢のタルタルソースが完成する。後はカリカリに揚げた牡蠣フライをつまみにビールを飲めば、幸恵はたいてい元気を取り戻していた。

雷雲を思わせるどす黒い空の下、犬の面と黒に近い紫色の学ランを着た男の子がゆっくりとした足取りで歩いている。仮面を着けた狭い視界を精一杯動かして、男の子は周囲を見渡した。
“珍しいな、これ程までに痕跡が見つからないとは……”

男の子の腕にはまった龍が輪を作ったような腕輪から、男の子と同じ歳のような声が聞こえてくる。

「もう、裏世界から出てしまっている……というのはいかな？」

“そうしたら、観測班から連絡が届くはずだ。後は裏世界の学校だな”

それを聞いて男の子は仮面越しにうんざりした表情を浮かべた。

「裏世界の学校って、どうしても肝試ししているみたいでイヤなんだよな……」

“何だ、魔犬手一の使い手ってチャホヤされている勇我(ゆうわ)様でも怖いものがあるんだな”

「五月蠅いなあ！人間誰しも苦手なことがあるんだよ」

勇我と呼ばれた男の子脳裏が突然チリチリと痛み出す。それは誰かからのテレパシーを受け取った証だ。

【三島が深界限界。離脱】

「これで、裏世界に残っているのは俺だけになるのか……」

“誰も、お前のように身体に仕込みを入れてないからな。そりゃあ、無理だよ”

【おい、いつまでチンタラ探しているつもりだ！！】

突然、勇我の脳裏に甲高い怒鳴り声が響いてくる。

“うちのお嬢が怒り出したな”

【黙れ、おしゃべり腕輪。他の者が帰ってきているのにお前は何をやっているんだ？】

「身体に耐性があるから、俺はまだ大丈夫なんだ。でも、こっちから痕跡が発見できないんだよ」

【もしかして、誰か魔犬手の中に入り込んでいるって事はないか？】

「まさか、そういう耐防御はしっかり制服に組んであるからそんなこと……」

と言いかけて、勇我はあることを思い出した。

「さっき、誰が深海限界って言ってた？」

“確か……三島って言うていたはずだが”

勇我が左手の手のひらに描かれている「御」という入れ墨に握り拳をかざすと、剣の柄が現れる。剣の鞘を抜くように勢いよく抜き払うと、鏢と鞘がない一降りの太刀が姿を見せた。

「三島は魔犬手使いの中で一番裏世界の耐性がない。だから、いつもは一番初めに限界を迎えるはずなんだ」

まるで目の前の空気を斬るかのように太刀を振り下ろすと、空間に一筋の裂け目が出てくる。

“お嬢が言った通り、魔犬手の中に入り込んでいる……ってわけか”

「すぐにそっちへ戻るから、それまで三島の事を頼むよ……八鳥子（やえこ）」

【お願いします……だ、馬鹿者！！】

さっきの一降りで出来た空間の裂け目に太刀を突き刺すと、今度は力一杯横に一薙ぎした。今は

裂け目は十字の傷となっている。勇我は両腕で顔を隠しながら十字の裂け目に体当たりをした。すると、景色が見慣れた夜の色を取り戻す。

“キィン”

という金属同士がぶつかり合う音と火花が校庭の方から聞こえてきた。

「あそこか！！」

勇我は太刀を肩に担ぐようにして、学校の廊下を走り出す。

「トウキョウの政治家達は、どうしてこう南国主義的な考え方をするんだろうね」
二十一世紀の中頃。日本は第三次領土拡張計画という……漁猟が見込めなくなった海部を見限ってメガフロートで周りを固めていた。そして、本土と沖縄の間にも大きなメガフロートを一つ建設し、米国が計画を見限ったカーボンチューブ製の宇宙エレベーターを建設した。

洋子はチューブに付いているロボット昇降機を眺めながら、瓶のラムネを一口飲む。強烈な炭酸の刺激が喉を通過していったことで、思わず身体をブルッと震わせる。

「この常夏みたいな気温は、一説によると宇宙エレベーターの駆動エンジンの廃熱って言われているんですよ」

洋子の隣でサーフィンボードを持ちながら味付き氷を舐めている小鳥が、洋子の方へ振り返った。海で小麦色にやけた肌と彼女の笑顔が今日も洋子の心を柔らかくしてくれる。

「でも、朝から海なんか入って大丈夫なの？」

歩き出そうとした小鳥は、再びそこで足を止めた。

「な、何で……そんなこと言うの？」

洋子は小鳥に追いつくと、彼女を学校がある方へ向けさせる。

「想像するに、小鳥は一時間目から勉強手つかずで居眠りして……二時限目が終わった頃には空腹に我慢できなくて泣きを入れてくるのよね」

「そ、そんなことないよーだ！！」

小鳥が小さく突き出した舌を見ながら苦笑をすると、洋子は誰かに名前を呼ばれて振り返った。

「朝も早くから仲が良いなあ」

自転車を漕ぎながら現れたのは、壁のように長身でスポーツマンタイプの筋肉質。

「そういう貴もね。何、泳いだの？」

「安心しろ、俺は小鳥と違って居眠りもしないし板書も綺麗に書くから」

「貴君、今私の悪口を言ったでしょ！！」

学校へ向かって歩いていた小鳥が怒った顔でこっちへ戻ってきた。

「別に、そんなこと言ってないよ。洋子ちゃんのお弁当をお裾分けを……」

最後まで言葉を言おうとしたところへ、洋子の肘打ちが貴の脇腹に深くめり込む。

「そのちゃん付けはやめんか！！弁当あげないんだから」

「そうは言われても……呼び捨てで名前を呼ぶ程の関係じゃないからなあ……」

ようやく、小鳥が洋子達の前に辿り着いた。

「じゃあ、どんな関係」

貴はしばらく考え込むと、何かを思いついたかのように“ポン”と手を打つ。

「俺がお父さんで洋子ちゃんがお母さん、小鳥ちゃんは娘だな……」

そう言った途端、予想通り洋子の肘打ちが待っていた。

「本当に、朝から何アホなこと言ってるのよ！！」

怒りながらも洋子は軽くため息を漏らした。小鳥は心を柔らかくしてくるのに反して、貴の言動にはいつも胸を締め付けられていた。

— まあ、お母さん……っていうのは間違いでもないけどね —

洋子は今日もスポーツバックの中に入っている二人のお弁当のことを思う。

「ほれ、早くしないと遅刻するよ」

その言葉に小鳥が小走りで学校に向かい始めると、洋子と貴は目を合わせて苦笑した。

「ねえ、公一（きみかず）？」

屋敷の二階にある書斎の窓に腰掛けていた森高が、その凛々しい顔をこちらへ向けた。男装の麗人……彼女を表現するならばそれが一番ピッタリと来る。公一は読みかけの本から目を離すと、こちらを見た森高の方を見た。

「何だよ、まさかもう飽きた……とか言うんじゃないだろうな？」

「違うわよ。昔、誰かさんはこの庭の木から落ちたことがあったなあ～ってね」

公一は指をほんの間に挟みながら、森高と向かい合うように書斎の窓越しに腰掛けた。

「ああ、あの一番大きな木か。よく覚えてたな」

「今ね、唐突に思い出したの」

彼女は原因不明の難病を治療するために数年にわたり多種多様な薬を併用することを余儀なくされる。その結果、彼女の記憶は虫食いのように多くを欠落し、男性ホルモンと女性ホルモンのバランスが崩れたことで彼女は少し男っぽくもなってしまった。記憶の欠落については肩を落としていたが、多少男性ホルモンが強くなったことに関しては両親がいないところでこっそりと喜んでいる。

「まあ、男の子……とまではいかなくても中世的な格好良い存在になりたいって憧れは抱いていたのよね。薬のおかげとは言え、それが叶ったのはちょっと嬉しいかな」

今二人がいる書斎でそういう告白を彼女から聞いたとき、公一は思わず啞然としてしまった。しかし、すぐに思い直す。

— 思えば、こいつは子供の頃から男っぽかったよな —

「何笑ってるの？」

不思議そうに公一を見ている森高を見て、彼は自分が声を出して笑っていることに気づいた。

「俺も、小さい頃の君を思い出したんだ。お前が木の枝をブンブンと振り回しながら、森の中を探検していく姿がさ」

森高は不思議そうな表情を公一の方へ向ける。

「そんなことあったけ？」

— そんな小さい頃の記憶も欠落していたか —

「そうだな、近所の悪ガキ共をまとめあげたりもしていたし。なんて言うかな……さながら女王様って感じだよ」

「何だよおー、私が女王様のように振る舞えるわけないじゃん」

突然頬をふくらませた森高の顔にそっとふれると、公一はやさしく指押し始めた。

「なーにを言っていることやら」

公一は森高の柔らかい頬に触れるたびに、何だか自分自身が元気になっていくのを感じる。

— こんなことを感じられるのは、きっと相手が森高だからなんだろうな…… —

「ねえ、公一。その、……お腹空かない？」

一度森高の顔を見た後、窓越しの隙間に料理本がおいてあることに気づいた。

「そりゃあ、紙に穴が空きそうなほど料理本を観ていればお腹も空くよ」

公一は彼女が読んでいた料理本を取り上げて、パラパラとページをめくっていく。そして、彼はとあるページでめくるのをやめた。

「どうしたの？何か嫌いな食べ物でもあった？」

「い、いや。何でもないよ。そろそろ夏の和菓子が出てくるなあ～って思ってさ」

公一はそのページを見たとき、不意に彼女が小さい頃大好きだった食べ物を思い出していた。

食べる人の笑顔

暑さを紛らわせるためにハンバーガーショップへ入ったヒトミは、バニラシェイクを飲みながら行き交う人々を眺めていた。一口ずつゆっくりと飲みながらあることをずっと考えている。

— 人を好きになるってどういう事なんだろう？ —

誰もがトキメキだなんだ……と言うが、本当にそれだけなのかヒトミには全然わからなかった。トキメキなら彼女は今通っている学校へ入学した直後に体感している。

— でも、それはどちらかと言えば憧れに近い —

「おまたへー」

トレイにサラダとジュースとアイスを乗せ、口にスプーンを咥えているアヤコがヒトミの隣に腰掛けた。

— 私は、彼女にときめいている…… —

「また、お昼を食べなかったの？」

「今日はお弁当を作ってこなかったのよ。学食は何だか私には脂っこくて……」

と言い終わると、笑顔で鶏肉が乗ったサラダをモグモグと食べ始める。

彼女はあまり健康ではなく、全体的に少し色素が薄かった。軽くウェーブが掛かっている髪をお団子にしているメガネっ娘は笑顔も可愛らしい。ヒトミはモグモグとサラダを食べているアヤコを見ながら、思わず頬をゆるめていた。

「なはぁに、ヒトミちゃん？」

「知ってた、アヤコちゃん。アイスクリームって油分が……モガァ」

最後まで言おうとしたとき、ヒトミはアヤコちゃんに両手で頬を抓られてしまう。

「糖分は脳を働かせるエネルギー源だからイイのよ！」

「ファーイ」

アヤコはヒトミの頬から手を離すと、満足そうな表情を浮かべながら再びサラダを食べ始めた。

「それで、期末テストも終わったわけだし、どこかに出掛けるつもりなの？」

「うん、坂の上のプラネタリウムで新作を上映するみたいだから行ってみたいの」

ヒトミはようやく、アヤコがシェイクを奢ってくれると言い出した真意に気づく。

— アヤコちゃん……相変わらず、自転車に乗れないんだよねえ —

「がんばって漕いで三十分ぐらいだよね？」

「一番最後の回にしようとして……思っているから、まだ……時間的には余裕があるわ」

「食べながら喋っちゃダメだよ」

「わかってるもん」

かわいく頬をふくらませたアヤコの頬にサラダのソースが付いているので、ヒトミは紙ナプキンで拭いた。

「なら、落ち着いて食べないとね」

— これは、きっとお母さんみたいな気持ちかな…… —

「だって、早く自転車の後ろに乗せて欲しいんだもん」

「慌てなくたって、ちゃんと乗れるんだから心配しないの」

「わかってるよおー」

また美味しそうな笑みを浮かべながらサラダを食べるアヤコを、ヒトミは頬杖を付きながら眺める。

— 憧れているけど、これは口に出して言えないこと —

これが“好き”という気持ちなのかは、ヒトミには理解できなかった。

怪談

この学校にはウワサがある。

“携帯の電波が届かない学校で携帯電話を使った者は、アカネさんに心臓を食べられる”

最初はよくある学校の怪談だと思っていたが、本当に死人が出てしまった。それが一年前のこと。ウワサによると、その死体には心臓が付いていなかったそうだ。

「そういえばさ……」

休み時間に漫画を読んでいた照子の髪の毛を結わえながら、香苗が声を掛ける。

「何？髪型を変な風に変えないでよ～」

「これはウワサなんだけどね、学校内で携帯を使った人がいるんだって」

香苗の言葉を、照子は信用しようとはしなかった。

「何を言ってるのよ、私たちが入学した当時に確か電波遮断の工事をしてたじゃない。今更学校内で使える場所なんて……」

「ウワサだとね、旧校舎ではまだ使えるんだって……」

香苗の言葉を聞いて、照子は思わず顔をあげる。

「旧校舎って……どこ？」

「何でも、この校舎の一部に昔の校舎だった部分があるんだって」

「校舎って言ってもなあ」

中高一貫のこの学校の中は、校舎というだけでかなりの数の棟が存在していた。

「中等下級生棟、中等上級生棟、高等下級生棟、高等上級生棟、職員棟、実習棟、体育館武道館って沢山あるわよ……。予想をするならば、教員棟かしらね」

「やっぱり、そうよね。大人達は決まって子供より自分たちを優遇するからなあ」

「荷物検査で携帯電話が入っていたら、取り上げるくせにしてね……」

照子は話を切り上げると、再び漫画に視線を落とす。

「真実性がない話に振り回されても仕方くない？」

「そう？面白そうじゃん」

— 怪談より恋バナの方がイイよ……絶対 —

照子は軽くため息を漏らした。

「ここもダメか……」

あの事件からもうすぐ一年が経とうとしている今、再び学校中に一つのウワサが流れ始めている。

“携帯の電波が届かない学校で携帯電話が使えた。その近くにはあっちへ行ける開かずの間があるらしい”

— 一体誰が……何の目的でこんな噂をまた流しているんだろう？ —

『圏外』と表示されている携帯の液晶から目を離し、手に持っていた入学案内のパンフレットに印刷されている校内見取り図に×マークを書き加えた。

「後は、中等下級生棟と実習棟か……」

“携帯の電波が届かない学校で携帯電話を使った者は、アカネさんに心臓を食べられる”
というウワサの元ネタはすでにわかっている。

— 人様の妹の死を怪談なんかにしやがって…… —

「絶対に、自殺なんてしていないってことを証明してあげるから」

携帯の電源を切って鞆の奥底にしまい込むと、彼女はその場を後にした。

誰だ、こいつ？

鷹島 浩介は唐突に我に返った。

「俺、一体何をしているんだろう……」

気付けば、もう20代も後半。半ば高専の社会人講師に騙されるようにして入った勤めていた会社。“お前が希望している職種に付く手伝いをしてやる”そんな言葉を信じていたのに、社会人講師は最初の一年でさっそうと蒸発してしまった。何の知識もなくいきなり大仕事を任されてどうにかこなしても低評価。今度は独学で弄っていたWebの仕事に転換させられて3年、ついにその仕事も無くなってしまった。ふと気付けば、何の仕事もなければ、どっちつかずの中途半端なスキルしか残っていない。

— どこを向いても行き止まりだ —

自己嫌悪が極まった次の日、浩介は会社を辞めていた。

失業保険を貰うために三ヶ月間は貯金で食いつなぎながら、東京で独り暮らしをしながらしていなかった東京観光をノンビリやってみる。

東京に独り暮らしを始めて五年になるが、浩介は観光名所なんて殆ど知らなかった。

— なんて、潤いのない生活を送っていたんだろうなあ…… —

そんなことを考えながら、浩介は自転車を漕ぐ。まずは自分が住んでいる区にある観光名所やら庭園を巡っていった。

「庭園っていうから無料で入れるもんだとばかり思っていたのに……」

入園料を払って中を見て回ると、ベンチで自分が作ってきたお弁当をひろげる。せっかく大家さんから一枚漬けの野沢菜を貰っていたので、浩介はそれで包んだおにぎりを主役にしてみた。浩介はさっそく大きめに口を開けて一口頬張ってみる。じゃこを使った自家製ふりかけをまぶしたのが丁度良い歯ごたえとなって、また美味しかった。

「さて、おかずの方も～」

と言いながら浩介が箸を持とうとしたとき、突然携帯電話が鳴り出す。

— こういうタイミングで掛かってくる電話は大抵良いことは無いんだよなあ…… —

「もしもし？」

その予感は見事に的中していた。浩介が会社を辞めたことが父親にバレてしまったのである。

— どうでもいいところだけ律儀でどうするんだよ、あの馬鹿社長は…… —

父親に新居へ来るように言われたので、渋々電車に揺られながらそんなことを考えていた。住宅街を走っていたローカル線の風景は次第に家が無くなっていき、左前方には海が見え始める。

— こんなところに新居とは……一体何を考えているんだ、あの親父 —

五年前に浩介の母親が亡くなってしまってから、何かに取り付かれたように海外を旅して回っていた親父が去年ようやく日本に帰国。新築の家を建てたということは電話で聞かされていたが、まさか鎌倉にあるとは予想していなかった。

「まさかサーフィン三昧な日々を過ごしてる……とか言うまいな」

鎌倉駅で下車し、海の方へ向かって歩くこと十数分。ようやく見慣れた名字の表札を発見する。浩介は少し緊張しながら、ドアチャイムを鳴らした。

「はい」

聞き覚えの無い声が聞こえたかと思うと、随分と若い女の子が玄関のドアを開けて出てくる。

猫になった私

世間は夏休み真っ最中。花火大会にお祭り……といつもより活気付いていた。目の前に広がる屋台の道と楽しそうな人達をよそ目に侑子はガックリと項垂れる。

「夏休みも……あと11日足らず……」

侑子は改めて自分の身体を見回してから、大きなため息を漏らした。その泣き声は“ニャア”としか聞こえない。それもそのはず、彼女の外見は誰がどう見ても猫にしか見えなかった。

— 何で、私が猫の身体?! —

八月一日、侑子の身体が猫に変貌してしまい、それからというもの自分が覚えている限りの場所や行動を繰り返してみるが成果は無い。

「もう、本当どうしたら良いのよ!!」

思わず叫び声をあげてしまったとき、誰かが近づいてくる足音が聞こえてきた。侑子は思わず暗がりに身を潜める。

「確か……ここら辺で……」

近づいてきたその人を見て、思わず侑子の胸は締め付けられる。

— 板東君だ…… —

小さい頃から侑子が淡い恋心を抱いていた、男の子がどんどん自分の方へ近づいてきた。— 夏休みだし、花火大会だし、お祭りっていう絶好のシチュエーションだっていうのに……。神様のバカァ —

「昼間だったら良かったのに。仕方ない、誰も見てないからいいか……」

そう言いながら、板東君は浴衣の袖から一本棒みたいなモノを取り出すと、それを使って空中に何か文字みたいなモノを書いていく。棒の奇跡を光が追い、何か紋様のようなものが描かれていくのが見えた。

— こ、これは一体……? —

「天に満ちあふれる万物の力。光源をここに、進むべき道をここへ」

彼が言葉を言い終わった途端、急に侑子の身体が淡い光を放ち始める。

「なっ、ちょっと。どうなっているの……」

侑子が言葉を言い終わるよりも早く、大きくて暖かい手が彼女の身体を持ち上げていた。侑子の目の前には板東の顔がある。

— 近っ!? —

「ようやく捕まえ……。っええ、侑子!!?」

板東がいきなり手を離れたのに気づかず、地面に背を打ち付けてしまった。

「痛っ!! 何よ、いきなり手を離さなくていいじゃない」

「ご、ゴメン。ちょっと、この展開には自分でもついていけなくて……」

打ち付けたところをさすりたくても、猫の足では背中には届かない。

「だからって落とさなくてもいいのに……。だいたい、何で私だってわかったの?」

「さ、さっき俺が変な事を言っただろ? アレは不思議な力の色や形なんかを見ることが出来る手品みたいなものさ……」

「色や形……」

「ぼ、ぼんやりだけど侑子の顔が見えたからさ」

板東の反応で、彼が何を見たのか侑子はピンと来た。

「板東君、一体どういうふうに関の姿が見えたのかなあ？」

和風ファンタジック

武哉は窓越しに空を見上げた。綺麗な空色、重そうな雲、キラつく太陽……。立春も過ぎて『残暑』へと突入していた。

「どうして、残っている暑さの方が暑いんだ」

幸い、武哉の住んでいるところは木造一軒屋。西側に窓が一つもないので、少し風通しが良くないのが欠点だ。

— 庭の草むしりをするのは、夕方過ぎにしよう…… —

部屋の中を一通り掃除して冷やしたグラスへ麦茶を注いだとき、池の庭に何かが落ちる音が聞こえる。

「ごめんするぜい」

冷やしたグラスをもう一つ取り出して麦茶を注ぐと、武哉はグラスをお盆に乗せて縁側へ向かった。縁側には先程、台所へいた武哉に声を掛けた人物が腰かけている。その人は和服を召した紳士で、その格好には似合わない麦わら帽子を被っていた。

「こんな暑い時間に来るとは思いませんでしたよ。花火大会は夜からだとお知らせしていたはずですが？」

紳士は武哉が持ってきた麦茶を一気に飲み干すと、一息ついてから口を開く。

「実はやっかいなことに、黒水灯が龍狂わせになっちゃってな」

「ほお……」

この世界は近代化と称して土が剥き出しの道をアスファルトで舗装していったが、それは超常の力を持つ妖怪や神々を地面に封じ込めるためでもあった。信仰と超常の力が薄れることで人間は工業の力を手に入れたものの、天候の災害を防げなくなったのである。そして公害と一緒に、中途半端に封印されたことで龍脈の乱れによって妖怪や神々の気がふれてしまう『龍狂わせ』という妖害まで発生していた。それら妖害を食い止めるため、秘密裏に陰陽省が復活し《八尾路凶徒楽園》という集団が結成される。武哉もそこに所属していた。

ちなみに黒水灯は雨と風を司る眷属の妖怪で、大陸から夏が残していった暑さを追い出し、秋の風を導く役割を担っていてもいる。

武哉はしばらく考え事をしてから、おもむろに両手を叩いた。

「そうか、先週の中越地震によって封印が砕けたところがあるんですね……」

「そういう事だ。数は四匹まで確認できている」

— なるほど、この暑さにも影響を与えていそうだな —

「まさか消滅命令……ということはありませんよね？」

「捕獲して御所に鎮めろってことらしい」

武哉はその言葉を聞いて、思わず眉をひそめる。

「少し、御所の結界に頼りすぎではありませんか？」

「俺に言わんでくれよ。じゃあ、頼んだぜ」

紳士の姿がフッと消えると、ビー玉ぐらいの小さな玉が空中へ消えていった。

「花火大会が始まるまでに帰ってこれるといいんですけどねえ」

武哉は流しにコップを片付けると、二階へあがる。廊下の突き当たりで足を止めると、武哉の目の前には赤い紐が掛けられたドアがあった。人差し指を使って空中に何かの文字を描くと、音を立てずに赤い紐が真っ二つに千切れ落ちる。

両引き戸のドアをカ一杯引くと、武哉の視界に祀られている一枚の仮面が目に入った。

そろそろ、異世界へ旅立ってみませんか？

「出口を出れば、そこは異世界だった……」

タカユキはそんなことを口走りながら、地下鉄の出口から地上へ出た。無論、いつもと同じ風景が広がっているだけで、異世界なんて広がっているはずもない。携帯電話で時間を確認すれば、後十分足らずで始業時間だ。

— どうせ職場へ行っても、今日も変な仕事しか用意されていないんだよな。やっぱり、自分で仕事を探してくるしかないのかなあ。 —

タカユキは歩みを早めようとするが、目の前の信号が赤に変わったので再びそこで立ち止まった。そこでふと、タカユキは空を見上げる。

— そういえば、何かの本で読んだけど……空は再び立ち上がる力を与えてくれるような存在だ…
…なんてことを言った人がいたよな —

信号が変わるまでの間空を見上げてみるが、特にそう言った不思議な力が流れ込んでくる気配はなかった。

「まあ、そんなもんだよな……」

信号が青に変わったので再び歩き出そうとしたとき、今度は黒猫が邪魔してタカユキの歩みを止める。

「何なんだよ、今日は？もしかして、世界は俺を会社へ行かせたくないのか？」

「まったくもって、その通り！」

自分の独り言に合いの手が入ったので、彼は思わず周囲を見渡した。そういえば、通勤ラッシュ時なのに誰も道を歩いていない。

「……気のせいかな？」

「んなわけないだろ？ 足下見ろよ」

言われたとおり足下を見てみると、さっきの黒猫がタカユキの方を見上げて“ニッ”と大げさな表情を浮かべていた。

「よお、ようやく気づいたな。馬鹿野郎め」

— こ、これは一体なんだ！！？ —

「……え、あ、う、お??」

「何うろたえてるんだよ、馬鹿野郎」

「人の事を二度も三度も馬鹿野郎って呼ぶな、この！！」

タカユキは誰も見ていないことを良いことに、黒猫が身を翻す前にしっぽを思いっきり握りしめると宙づりにする。

「で、喋る黒猫。一体全体、これはどういう事なんだ？」

「勿論、俺様の仕業に決まってるだろ？……おい、もう少し人様は丁寧に扱えよ」

「だから何で？」

タカユキは黒猫を自分の目線の高さまで持ち上げた。

「お前は階段を上がりながら願っただろ？」

黒猫がそう言った途端、タカユキの動機が早くなるのが手に取るように感じられる。

「何だと？」

「お前は願ったはずだ。外に出たら異世界だったら良いのに……ってな」

「ま、まさか……」

「そう、ここはお前が望んだ異世界だ」

チーズケーキ

玉城 芳雄は週末だというのに外へ出掛けることなく、窓際で雑誌を読みながら冷酒を飲んでいた。遊びに行く友達も彼女もない芳雄は別にインドア派というわけではない。むしろ、週末になればあちこちブラブラしていたが、ここ最近は家にいることが多くなっていた。いつものように携帯ゲームをしながら通勤電車に乗っていたとき、変わり映えのない行動範囲と作業しかしていないことに気づいてしまったのである。そうすると、芳雄は部屋にこもった。買って軽く目を通しただけの雑誌をじっくりと読み、積んでいたDVDを見て、お腹が空いたら自炊する。

「どこかへ旅行するのも良いかもなあ……」

でも、一人旅は二泊三日に限ると……芳雄は体感していた。話し相手がいない、まるで内面と向き合うような旅は、自分自身をネガティブの道へ歩ませてしまうだけ……。そんなことを旅行雑誌を見ながら考えていると、お腹から空腹が聞こえてきた。

今日の気分は魚だったので、朝起きて自然解凍させていた。鮭の切れ目を調味料とレモン汁を垂らしながら焼こう……と思いつく。

グリルを一度暖めてから、アルミホイルで作った皿に刻んだキノコやタマネギを乗せてから、鮭の切り身を乗せた。そのまま塩とこしょう、料理酒を振りかけ、最後にレモンを搾る。

ふと、レモンを絞った香りが芳雄の鼻先をかすめたとき、頭の中には鮭とは違う食べ物が思い浮かんでいた。それは、実家にいた頃……母が良く作ってくれた焼きチーズケーキのレモンの風味。どうして、唐突にチーズケーキのことを思い出したのか芳雄にも判らないが、味まで思い出してしまうと食べたくてしょうがなくなってきた。でも、そんな事のために今から実家に帰っても仕方ない……。でも、自分の部屋にオーブンはないし、近所の洋菓子店はどこも都市再開発区域にあったことで店を移転してしまっていた。試しにコンビニで売っていたチーズケーキを数種買ってみるが、どれも自分が求めている味とはほど遠かった。

インターネットでレモン風味のチーズケーキについて検索してみる。これまで何も考えずに食べていたチーズケーキがゲーセ・クーヘンというドイツのスタイルだということを知った。

「食べ物って不思議だよな……」

思ったことを、思わず独り言として呟いてみる。食べ物は発祥の地とか知らなくても“美味しい”、“美味しくない”という事だけ判っていれば安心して体内に取り込めることができるのだ。魚焼きグリルに再び火を灯しながら、そんなことを思う。

グリル内の温度が上がってバターが徐々に溶けていく様を見ながら、芳雄はひとつの妙案を思いついた。レモンを切ると、食べ残していたチーズケーキに振りかけて一口食べてみた。

「……やっぱり、違うなあ」

芳雄は蓋をして残ったチーズケーキを冷蔵庫に入れると、再びグリルに視線を移す。鮭の表面に程よい焼き目が付いたので、鮭を裏返して軽く調味料とレモン汁を振りかけてからグリルの中に戻した。その間にインターネットで今度は焼きチーズケーキを店舗販売しているところを検索してみる。しかし、思ったとおりの検索がなかなかヒットされなかった。どうやら、レアチーズケーキとか底がクッキー生地のものの方が圧倒的人気があるらしい。

ふとわれに返って、急いでグリルの前に戻って中を確認した。よしよし、焦げてはいないな。

最後にバターを一片落とす。ほんの少しバターの形が残るぐらいのところまでグリルの火を止めた。そのまま、数分間料理を寝かせる。熱々もおいしいが、少し寝かせることで料理がグッと美味しくなる……と何かで聞いて以来、それを実行していた。ホイールごと皿に移して窓際へ。来週はチーズケーキを求めて出かけることを心に決めた。

ドライカレー

午睡町に越してきて二週間、早くもこの場所で作業をするようになっていた。ご飯も美味しいし、コーヒーも美味しい。何より地下の劇場で少し昔の映画が2本立てで上映されているのが、また魅力的だ。

「あら、先生。今日もここでお仕事ですか？」

ホットのロイヤルミルクティを持ってきてくれたウェイトレスの石森さんが、私の手元を覗き込んでくる。彼女が見ている先にあるのは白紙の原稿用紙が置いてあった。原稿用紙とにらめっこをしている私は、一応物書きを商売としている。

面白いかどうかは別として……。

「さっきまで自宅で仕事してたんだけど、気分転換にこっちでね」

湯気に気づいて視線を上げると、マスターがドライカレーを置いてくれた。

「とか言いつつ、目当ての映画を観たいんだろ？」

それは、正解。今週上映されている映画は映画館で数回観て、DVDも買っている。それでも、やっぱりスクリーンで観てみたかった。

「それで、今度は何の小説を考えているんですか？」

「カレーを題材にした小説を書く事になっているんだけどさ。中々思いつかなくてね」

「ご自分でカレーを作ってみたらいかがですか？」と石森さん。

「作ってみたいんだけど、ドライカレーしか作れなくてさ」

「それも、カレーなんじゃないのか？」

カレーという名前が付いているから、それは確かなんだろうけど……。

ふと、声と湯気に気づいて顔をあげるとマスターがカレーを持って立っていた。

……しかも、大盛りのドライカレー。

「あれ、ドライカレー？」

マスターは、小さいため息を漏らしながらドライカレーが盛られたお皿を置いてくれる。

「ウチのカレーはドライカレーしかないよ」

思わず、自分の額に手を当ててしまった。そうだった、そういう事も十分起こりえるんだよな……。

「なら、もうドライカレーを題材に書くしかないですよね？」

石森さんの言葉に私は思わず苦笑を浮かべてしまった。

「そうだな……」

そのまま原稿用紙に『ドライカレー』と書いて、大きめの丸で囲む。これをキーワードにこれから物語を書いていくのだ。しかも……二日以内になんて結構無茶な話である。

そういえば、夕方に観ようとしているショートショート映画集の中に買ったばかりにタマネギを奪われてしまい、それを取り戻そうと一騒動起こる話が混ざっていたのを思い出した。

スパイスと……たまねぎ？そういえば、主人公がひたすら走り続けるアイディアがあったけなあれこれ悩みながら、ドライカレーを一口ほおぼる。複雑なスパイスの辛みと挽肉の甘さ、トマトの酸っぱさが混ざり合って美味しい味を作り出していた。

「まあ、そんなめんどくさい言い回しはやめよう……美味しい！！」
ゆっくりとドライカレーの味を噛みしめながら、再び思考を巡らせる。
カレーにロマンスはどうだろう??でも、登場人物はできるだけ少なめにした方が良さな……
。
すべての話に必ず登場する人物が物語りを振興して、色々な人から料理を作った事を聴きつつ、
自分はカレーを作る。で、そこは水没した世界だったと??最後に世界観の説明は面白そうだ。

落下世界のはじまり

目蓋をあげなくても、濃い緑がいっぱいに生い茂っているのがわかる。

新緑が芽吹く春の森に、周囲が沢山の気配で満ちていくのがわかった。

沢山の亜民達の中に一つだけ特別な気配を持った者がいた。

我が妖精姫。

目を開けて見えるのは、今も変わらぬ幼くも凛々しい姫様のお姿だ。

彼女のサファイアブルーの瞳で見られると、今更ながら自分が少年へ戻っていくような気がする。

「姫様……」

「何だ？」

彼女の笑みは、まるで太陽のようだ。

「姫様のお力で他人よりほんの少し長く生きる事ができましたが、ここらでお暇を頂戴いたします。姫様に見守られて……」

『地より導かれし、母なる力よ。どうかこの者の魂に安らぎを、新たなる旅の門出を』

姫が男を中心に、円を描くように花びらを蒔きながら歌を歌っていく。

その後を続くように妖精達も花びらを散らしていった。

『黄金郷の門よ、開け！！』

姫の言葉を合図に、陽気な演奏が始まる。

花びらは一つの大きな魔法陣を創り上げ、黄金色に色づけられた風が花びらをまとめて舞い上がった。

大地から遥か彼方に離れて浮かんでいるその場所へ向かって、風は向かっていく。

肉体は朽ち果て、精神と魂だけの存在となった彼を乗せて花弁をまとった黄金色の風は舞った。

舞い上がる途中で、風の中から一筋の光が流れ星のように大地へ落ちるのが見える。

姫は、それをただ見つめていた。

「時代が、動こうとしている……」

そう言葉を紡ぎながら、空の浮かび三日月状の光を放つ星へ視線を向ける。

「もうすぐ、“世界が落ちてくる”」

微妙に濃さが違う黒緑色が何重にも重なっている、古来から残された神々しい森。その下は剥き出しの土ではなく、歪にひび割れたアスファルトの道が縦横無尽に張り巡らされていた。

「...！」

突き抜けるような風景に響く木霊のように、何匹もの犬の遠吠えが合わさって響く。その度に神々しかった森は悲鳴を上げ、立派な木々が何本も根本から折れていった。

次の瞬間、人の大きさではない二つの影が森の切れ目から躍り出る。

一つは全長約五メートル程の大きな猿だ。炎を体毛みたいに纏っているが、身体中の傷口から吹き出す黒い血潮で鎮火している。

<...！.....！！>

その猿が発する怒りが込められた叫び声は、顔面を覆い隠す目も口もないタール色の仮面が遮断していた。よく見ると、右上半身の大半もタール色の物体によって塗り固めるように覆われている。黒い血は無数に走る亀裂から吹き出していた。

もう一つは、最初に出てきた猿のように巨大な存在である。鋭利で巨大な爪が生えていて、装甲板を何重にも重ねた手甲を覆った不格好な長腕は、無数に亀裂が走って焼き溶けかかっていた。二本の角を生やした髑髏の頭部も半壊し、巨体を覆い隠すマントはボロボロになっている。

そんな状態でも平然と身体を動かすソレは、『化け物』より『鎧』と表現した方がピッタリだ。“モリカラヒキハナセタゾ”『鎧』から何の感情も籠もっていない、無機質な声が響いてくる。シュッ！と音を立てて、『鎧』のボロボロなマントがうねり、猿にキツく縛った。

<ぎぎぎぎぎいぎぎ！>倒れ込んだ猿が奇声を発しながら、顔を『鎧』の方へ一瞬で向けた。顔を覆っていた目も口もないタール色の仮面が、卵の殻が割れるように口元から顎の部分に掛けて割れている。割れた箇所から見えるのは猿の顔ではなく、黒灰色をした髑髏の顎部分だ。

“セツワ、キヲツケロ”

「オラああああ！！」

突然、半壊した髑髏の頭部から活発な青年の雄叫びが聞こえてくる。鎧が自前の爪を勢い良く振り下ろすよりも早く、猿の割れた仮面部分から勢い良く炎が吹き出した。炎は周囲の水分を瞬時に蒸発させ、鎧を宙に釘付けにする。

「あああああつあああああ！！」

それも一瞬の事で炎の勢いより鎧が爪を振り下ろす勢いが勝り、猿の顔面を覆っていた仮面を完全に貫いた。

そのまま鎧がもう片方の腕に生やした爪で、猿の左胸付近も貫く。何かを掴んだ感触を得ると、そのまま躊躇する事無く腕を引き抜いた。

無数の亀裂が走っている鎧の顎具が外れて大きな口が露出すると、その中へ玉を放り込んだ。まるで生物のように何回、十何回、何十回と良く噛んだ後で“ゴクリっ”と喉を鳴らして飲み込む。

「無味無臭な変な物体が喉を通るのは、未だにイヤだよ」

“コッピドクヤラレタナ”

ガラスが砕けるような音が聞こえたかと思うと、ボロボロになった巨大な「鎧」が消え去った。「鎧」に変わって、一匹の犬と血塗れの青年が姿を現す。

「……うるせえ」

青年が着用している暗紺色の詰め襟学生服は、先程の鎧と同様にボロボロで自身の血で染め上がっていた。

犬にセツワと呼ばれた青年は、徐々に塵と化していく猿の死骸へ腰掛けた。しかし、猿の死骸は塵になったので、地べたにあぐらをかいて座り直す。

「何か飲み物持ってない？」

“ソナモノナイ”

「言ってみただけ」

セツワは自分の横にいる目も耳も口も無い犬を見て苦笑した。